

令和6年度

授業改善グランドデザイン

「学びの変革推進プラン」
施策1の推進に向けて

全国学力・学習状況調査の結果分析と学力向上の方略

1	全国学力・学習状況調査の結果の概要	P1
2	質問調査の結果に見るふくしまの強みと課題	P3
3	各教科の分析及び授業改善のためのポイント	P5
4	課題克服に向けた授業改善3つのポイント	P9
5	ふくしまの強みを生かし、課題の克服を目指して！	P11
6	各調査の特色に応じて～「ふくしま学力調査」との整理～	P13



令和6年8月
福島県教育庁義務教育課



©すべてのデータを、福島県教育庁義務教育課WEBサイトからPDFでダウンロードいただけます。



<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/70056a>

または

福島県教育庁義務教育課

検索

1 全国学力・学習状況調査の結果の概要

調査に関する概要

実施日	令和6年4月18日（木）		
実施校数	小学校 382校	中学校 209校	
調査学年	小学校 6年生	中学校 3年生	
調査教科	小学校 国語、算数	中学校 国語、数学	

※ 実施校数は、4月18日に調査を実施した数である。

※ 義務教育学校（前期課程・後期課程）及び特別支援学校（小学部、中学部）を含む。

校種・教科に関する調査結果の概要

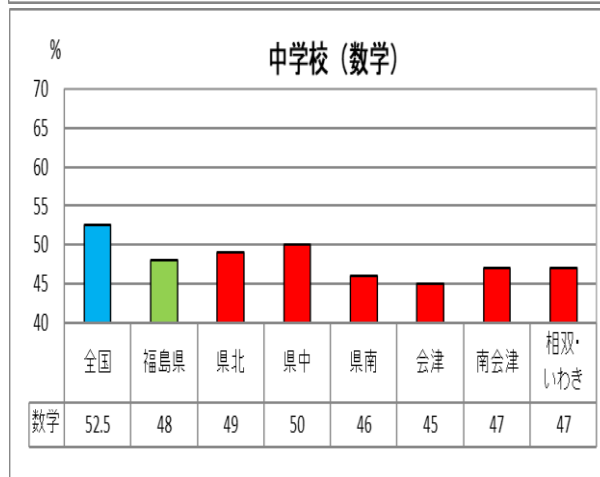
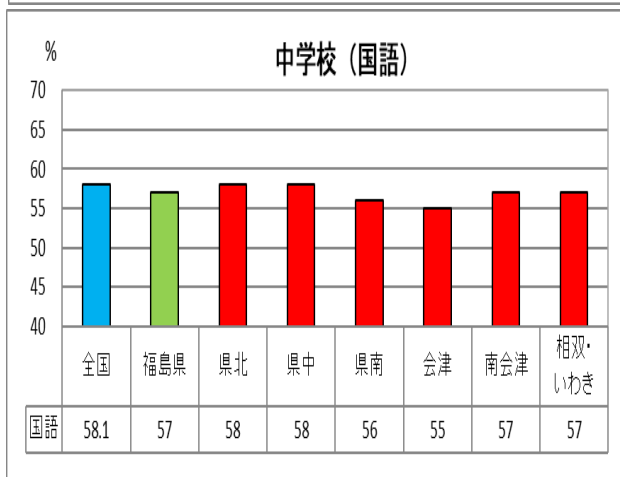
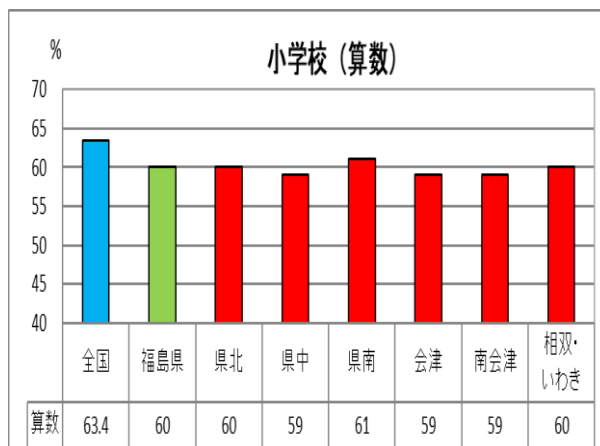
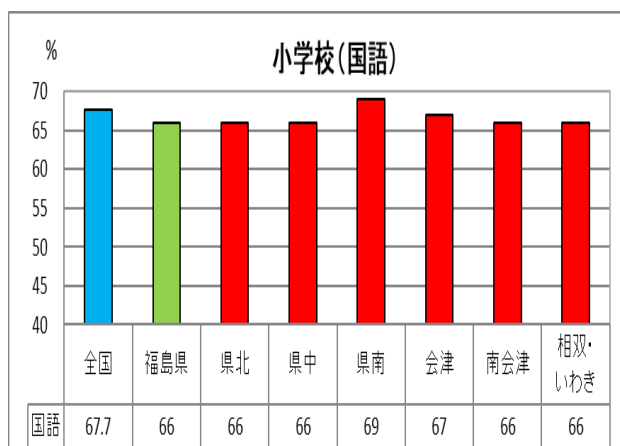
校 種	教 科	対象児童生徒数	福島県平均正答率	全国平均正答率	所 見
小学校	国 語	12,557	66	67.7	全国平均をやや下回っている
	算 数	12,550	60	63.4	全国平均を下回っている
中学校	国 語	12,901	57	58.1	全国平均をやや下回っている
	数 学	12,899	48	52.5	全国平均を下回っている

※ 児童生徒数は、4月18日に調査を実施した数である。

※ 国の公表方針及び提供資料に基づき、県の数値については整数値による公表である。

生活圏平均正答率の状況

- 県内の生活圏別（県北、県中、県南、会津、南会津、相双・いわきの6地域）平均正答率は、次のとおりである。



児童生徒質問調査及び学校質問調査の結果

全国平均との比較及び福島県における経年推移から、福島県の児童生徒には次のような傾向が見られる。

- 授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができていると回答している児童生徒の割合が高く、全国平均を上回っている。
- 小学校算数の学習を「好き」「どちらかといえば好き」と回答している児童の割合は、全国平均を上回っている。一方、中学校数学の学習を「好き」「どちらかといえば好き」と回答している生徒の割合は、全国平均を下回っている。
- 自分にはよいところがあるかについて、「当てはまる」と回答している児童生徒の割合は、全国平均を下回っている。しかし、経年推移においては増加傾向にある。
- 中学校の授業中に ICT 機器を「ほぼ毎日」または「週3日以上」使用していると回答している生徒の割合は、全国平均並である。一方、小学校の授業中に ICT 機器を「ほぼ毎日」または「週3日以上」使用していると回答している児童の割合は、全国平均を下回っている。

○児童生徒質問調査、学校質問調査の概要

質問の概要	児童生徒質問の番号	学校質問の番号
(1) 学習指導要領の趣旨を踏まえた教育活動の取組		
①主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善	〔29～37〕	〔25～35〕
②個別最適な学び・協働的な学び	〔32、37〕	〔28、30、31〕
③カリキュラム・マネジメント		〔12～14、40〕
(2) ICTを活用した学習状況等	〔27～28〕	〔小53～66〕 〔中57～70〕
(3) 学習に対する興味・関心や授業の理解度（児童生徒） 教科の指導方法や授業について（学校）	〔小42～63〕 〔中42～65〕	〔小41～52〕 〔中41～56〕
(4) 児童生徒の挑戦心・自己有用感・幸福感等に関する状況	〔9～19〕	
(5) 学校外での過ごし方（勉強時間、テレビゲーム等の時間）	〔20～24〕	

調査結果の総括(公立)

- 本年度の全国学力・学習状況調査における教科に関する調査結果は、小・中学校国語が全国平均をやや下回っており、小学校算数及び中学校数学は、全国平均を下回る厳しい状況が続いている。
- 質問調査によると、国語や算数の勉強が好きであると回答した児童生徒の割合が高い傾向にある一方、数学については全国と比較して低い傾向にある。各学校においては、児童生徒が興味・関心をもてるよう、創意工夫を凝らしながら指導に当たっているものの、求められる資質・能力を十分に育成できていないことが課題である。特に、数学の授業においては、問題を自立的、協働的に解決することの楽しさや喜びを実感する場面を増やしていくことが必要不可欠である。
- 本調査結果を学習の成果を捉えるための評価で終わらせることなく、校内研修の充実、家庭での学習習慣や生活習慣の確立に向けた働きかけなど、学校の教育活動を見つめ直すためのデータとして活用していくことが重要である。

2 質問調査の結果に見るふくしまの強みと課題（児童生徒質問調査）

「主体的・対話的で深い学び」の意義や価値を実感しながら学習活動に取り組んでいます。



児童生徒質問調査から、「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると感じますか」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」について、小学校・中学校とも全国平均を上回っています。

授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると感じますか

児童生徒質問調査 小〔35〕 中〔35〕	小学校		中学校	
	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）
県平均（％）	87.3	+3.6	82.5	+3.5
全国平均（％）	83.7		79.0	

学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか

児童生徒質問調査 小〔33〕 中〔33〕	小学校		中学校	
	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）
県平均（％）	88.5	+2.2	88.4	+2.3
全国平均（％）	86.3		86.1	

強み



学習指導要領や「学びの変革推進プラン」に基づく学習指導を行うことにより、児童生徒一人一人が、自分のよさや可能性を認識するとともに、友達一人一人のよさを受け入れながら学び続けようとする意識が高まっていることが分かります。



分らないことがあっても、児童生徒が自分で学び方を考え、工夫することができています。



児童生徒質問調査から、「分らないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」について、小学校・中学校とも全国平均を上回っています。

分らないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか

児童生徒質問調査 小〔20〕 中〔20〕	小学校		中学校	
	「できている」または「どちらかといえば、できている」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）	「できている」または「どちらかといえば、できている」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）
県平均（％）	83.3	+2.6	79.7	+1.1
全国平均（％）	80.7		78.6	



「学びの変革推進プラン」に基づき、個別最適な学びと協働的な学びの充実を図っていることで、児童生徒が多様な学び方にふれる機会が増え、試行錯誤しながら学びを進めていることが分かります。



まとめや適用問題を通して、児童生徒に分かる、できるを実感させることが重要です。

課題

算数（数学）の授業の内容はよく分かりますか

児童生徒質問調査 小〔52〕 中〔52〕	小学校		中学校	
	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）
県平均（％）	81.3	-0.8	73.0	-2.7
全国平均（％）	82.1		75.7	

算数（数学）の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか

児童生徒質問調査 小〔54〕 中〔54〕	小学校		中学校	
	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）	「当てはまる」または「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合	全国平均との差（ポイント）
県平均（％）	81.4	+3.5	60.8	+3.6
全国平均（％）	77.9		57.2	



「算数（数学）の授業の内容はよく分かりますか」については全国平均を下回っていますが、「学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」については全国平均を上回っています。多くの児童生徒たちが算数・数学のよさを実感しているものの、分かる、できる実感は伴っていないと考えられます。児童生徒に、学習内容をまとめて何が分かったのか、学習内容を活用して問題を解き何ができるようになったのかを実感させることが重要です。授業の中でまとめや適用問題の時間を確保し、学習内容の確実な理解と定着を図っていきましょう。

2 質問調査の結果に見るふくしまの強みと課題（学校質問調査）

児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めることができるよう、適切に支援しています。

調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、学校では、家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えましたか

学校質問調査 小〔71〕 中〔75〕	小学校		中学校	
	「よく行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)	「よく行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)
県平均 (%)	52.8	+5.6	42.6	+9.7
全国平均 (%)	47.2		32.9	

調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学校では、児童が行った家庭学習の課題について、その後の教員の指導改善や児童の学習改善に生かしましたか

学校質問調査 小〔73〕 中〔77〕	小学校		中学校	
	「よく行った」または「どちらかといえば、行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)	「よく行った」または「どちらかといえば、行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)
県平均 (%)	91.9	+4.1	88.5	+5.7
全国平均 (%)	87.8		82.8	

学校質問調査から、教師が児童生徒一人一人の実態を踏まえ、個々に合った具体的な学習方法などを挙げながら支援したり、授業づくりに生かしたりしていることが分かります。



協働的な学びや探究的な学びの質的向上、指導計画と評価計画の明確化が重要です。



学校質問調査から、「授業において、児童生徒自ら課題を設定し、解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか」「評価規準や評価方法の明確化・共有化や、校内組織の活用等、組織的かつ計画的な取組をしましたか」について、小学校・中学校とも全国平均を下回っています。

調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、授業において、児童（生徒）自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか

学校質問調査 小〔33〕 中〔33〕	小学校		中学校	
	「よく行った」または「どちらかといえば、行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)	「よく行った」または「どちらかといえば、行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)
県平均 (%)	84.0	-5.3	82.3	-2.8
全国平均 (%)	89.3		85.1	

調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、評価規準や評価方法の教員間での明確化・共有化や、学年会や教科等部会等の校内組織の活用等、組織的かつ計画的な取組をしましたか

学校質問調査 小〔40〕 中〔40〕	小学校		中学校	
	「よく行った」または「どちらかといえば、行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)	「よく行った」または「どちらかといえば、行った」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)
県平均 (%)	84.5	-2.6	85.2	-6.0
全国平均 (%)	87.1		91.2	



強み（よさ）にあるように、児童生徒は「主体的・対話的で深い学び」の意義や価値を実感しています。教師が教え込む一方通行の画一的な授業から脱却し、協働的な学びや探究的な学びの質的向上を図っていきましょう。

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」を参照しながら、単元全体を見通した指導計画と評価計画を明確にして、指導と評価の一体化を図っていきましょう。



ICT 機器を効果的に活用するなどして、協働的な学びを充実させていくことが重要です。



学校質問調査から、「教職員と児童生徒がやりとりする場面では、ICT 機器をどの程度使用させていますか」「児童生徒同士がやりとりする場面では、ICT 機器をどの程度使用させていますか」について、小学校・中学校とも全国平均を下回っています。

教職員と調査対象学年の児童（生徒）がやりとりする場面では、児童（生徒）一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか

学校質問調査 小〔59〕 中〔63〕	小学校		中学校	
	「ほぼ毎日」または「週3回以上」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)	「ほぼ毎日」または「週3回以上」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)
県平均 (%)	44.9	-14.8	48.8	-8.6
全国平均 (%)	59.7		57.4	

調査対象学年の児童（生徒）同士がやりとりする場面では、児童（生徒）一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか

学校質問調査 小〔60〕 中〔64〕	小学校		中学校	
	「ほぼ毎日」または「週3回以上」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)	「ほぼ毎日」または「週3回以上」と回答した割合	全国平均との差 (ポイント)
県平均 (%)	35.7	-9.3	36.4	-4.7
全国平均 (%)	45.0		41.1	



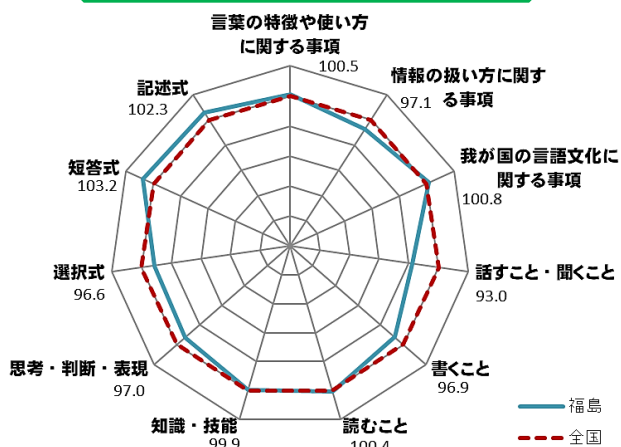
授業においてICT機器を活用している割合は年々増加しています。児童生徒同士の学び合いや練り上げの場面等でICT機器を効果的に活用して、児童生徒の多様な考えを交流させながら、協働的な学びの充実を図っていきましょう。



3 各教科の分析及び授業改善のためのポイント

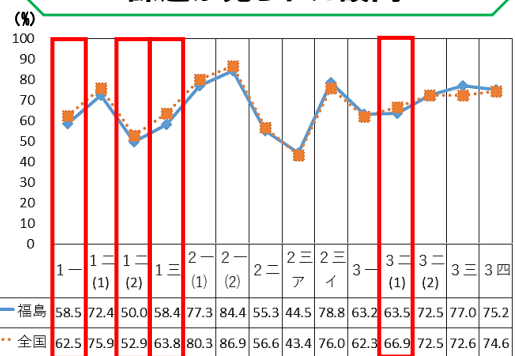
小学校国語

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

課題が見られた設問



- 1-1 「目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討する」
- 1-2(2) 「資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫する」
- 1-3 「目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討する」
- 3-2(1) 「登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉える」

福島県で取り組むべき課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

〔国語1〕学校の取り組みをオンラインで紹介し合う
設問一 「目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討する」

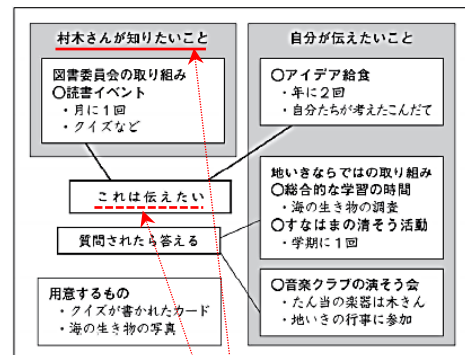
② 誤答分析から

メモの内容を「取り組みのよい点」と誤って捉えた児童は21.6%でした。このことから、メモの中の限られた情報のみで解答を導こうとし、メモに書かれた他の情報やメールにある聞き手からの求めについての情報を整理したり、関係付けて考えたりすることができなかったための誤答と考えられます。

③ 指導の重点

伝え合う内容を検討する際、目的や方向性、聞き手の求めていることなどを整理し、それを踏まえて内容を検討する場面を設定します。その際、伝える情報を整理したり、優先順位を付けたりする過程を充実させることが大切です。

【和田さんのメモ】



一 和田さんは、「和田さんに届いたメールの内容」を受けて、しようかいます内容を、次の和田さんのメモのように整理しました。和田さんは、どのように整理しましたか。その説明として最も適切なものを、下の1から4までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

【和田さんに届いたメールの内容】

- 1 おたがいの学校の取り組みのよい点を比べて、伝えることを明確にした。
- 2 おたがいの学校の取り組みの問題点を比べて、伝えることを明確にした。
- 3 相手の知りたいことを取り入れて、優先して伝えることを明確にした。
- 4 自分が知りたいことを取り入れて、優先して聞くことを明確にした。

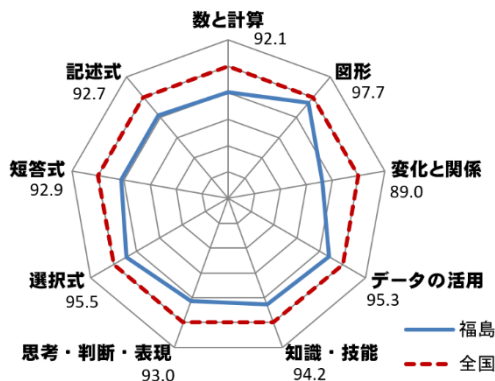
複数の情報の中から、必要となる情報を取り出し、関係付ける力の育成が求められます。

〈授業改善のポイント〉

- 話し合いの前に、目的や方向性などを共有するための「打合せ」の時間を設定することがポイントです。「打合せ」をすることで「これだけは伝えたいこと」などを整理し、話す内容を検討することができます。
- 児童が様々なアイデアを出し合い、話す内容を検討できるようにすることも大切です。また、伝え合う場面を想定して、即興的に分かりやすく伝えられるよう、資料を用意することも考えられます。

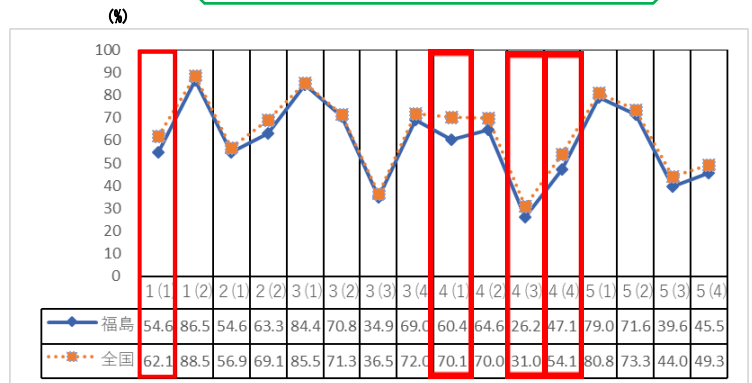
小学校算数

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

課題が見られた設問



- 1 (1)「問題場面の数量の関係を捉え、式に表す」
- 4 (1)「除数が小数である場合の除法の計算をする」
- 4 (3)「道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる」
- 4 (4)「速さの意味について理解している」

福島県で取り組むべき課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

設問 4 (1)「除数が小数である場合の除法の計算をすることができるかどうか」の誤答分析をすると、以下の点に課題があります。

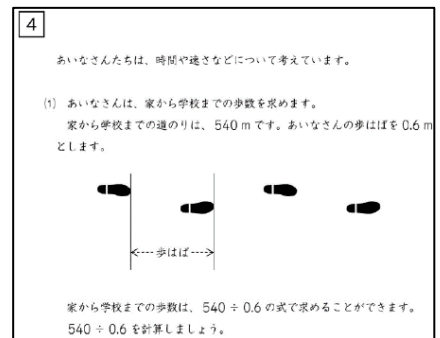
② 誤答分析から

誤答である「90」と解答した児童の割合は23.2%でした。除数の0.6のみ10倍して整数にし、 $540 \div 6$ を計算していると考えられます。また、同様に誤答である「9」と解答した児童の割合は5.6%でした。わり算の性質を正しく活用できず計算したり、除数が1より小さいときの商の大きさについて振り返ったりしていなかったことが要因として推測されます。

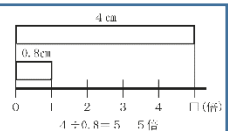
③ 指導の重点

除数が小数である場合の除法の計算について、整数の場合の計算の意味や計算の仕方を利用して、計算ができるようにすることが重要です。例えば、 $540 \div 0.6$ の商が $5400 \div 6$ の商である900と等しいことに気づかせ、その意味の理解を基に計算する学習場面を設定します。

また、除法では除数が1より大きい場合は商が被除数より小さくなり、除数が1より小さい場合は商が被除数より大きくなることから、 $540 \div 0.6$ の商が540より大きいと捉えることができるようにすることも大切です。



数直線などを用いるなどして、理由を説明できるようにしましょう。
※右図は $4 \div 0.8$ の場合

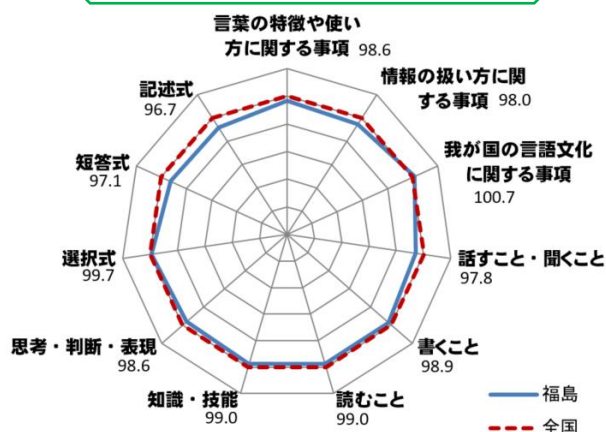


〈授業改善のポイント〉

- 計算に関して成り立つ性質を活用して、計算を能率的に処理できる場合があることに気付かせ、計算を工夫できるようにすることが重要です。さらに、答えの求め方について、筋道を立てて説明できるようにすることも授業改善のポイントとなります。
- 計算した結果が、問題の答えとして適切かどうかを振り返る場面を設定し、計算の仕方が正しいかどうかを批判的に考察する機会を積み重ねていくことが重要です。

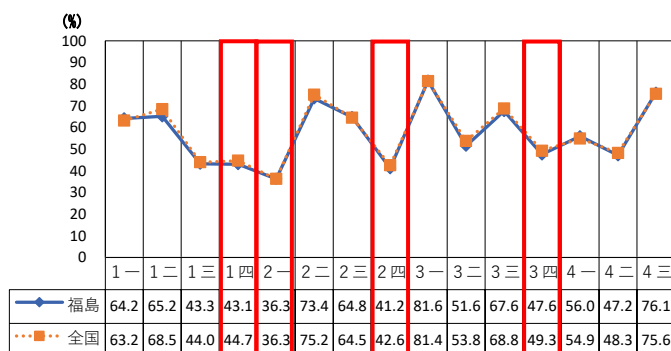
中学校国語

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

課題が見られた設問



- 1 四「話合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめる」
- 2 一「文章と図とを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈する」
- 2 四「目的に応じて必要な情報に着目して要約する」
- 3 四「表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫する」

福島県で取り組むべき課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

〔国語 2〕 説明的な文章を読む（「葉の形」）

設問四「目的に応じて必要な情報に着目して要約する」

② 誤答分析から

選んだ「着目する内容」について、必要な情報を適切に取り上げて書くことができていない生徒が 35.7%、その他の誤答が 14.0%、無回答が 9.1%でした。選んだ「着目する内容」と自分が書いた要約とを照らし合わせて、必要な情報を十分に取り上げているかを確認することなどができていないものと考えられます。また、その他の誤答から、本文の内容を正確に捉えて要約することにも課題があると考えられます。

③ 指導の重点

要約する際には、**相手や目的を明確に**することが大切です。例えば、「動画視聴やゲームをして過ごすことが多い中学生（相手）に対し、休日の時間の過ごし方を見直すきっかけにしてもらう（目的）ために、休日の過ごし方について書かれた新聞記事（情報）を要約する」というように**学習活動をより具体的に**しましょう。このことにより、生徒は情報を適切に取り出しているか、文章の内容と要約にずれがないかを主体的に考えるようになり、授業者もポイントを押さえた支援をすることができそうです。

当該学年は、小学校第6学年時の令和3年度全国学力・学習状況調査においても、要約が課題となっていました。このことから、小学校も含め、学年間の系統性を意識した指導の重要性が明らかになっています。



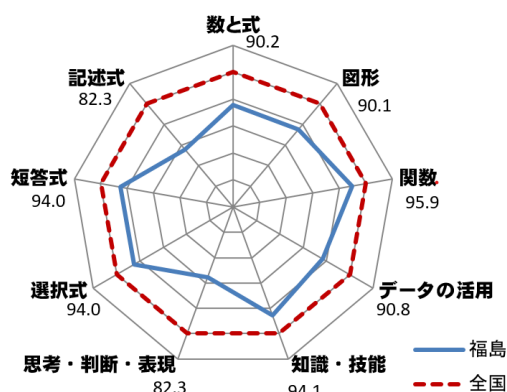
四 本文に書かれていることを理解するために、着目する内容を決めて要約します。次のア、イから一つ選んで（どちらを選んでもかまいません）要約しなさい。
なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消した行間に書き加えたりしてもかまいません。
ア 筆者が、葉の形を表す言葉などのようなグループに分け、各グループにどのような特徴があると述べているかについて。
イ 筆者が、数学や物理学など生物や化学とは、学問としてどのような違いがあると述べているかについて。

〈授業改善のポイント〉

- 授業では、他者の発言や図表などから情報を取り出し、考え、表現する学習活動を意図的に設定しましょう。生徒の表現が、情報を十分に生かしていない場合は、「○○さんの意見のどの部分と関係しているかな」「図表のどの部分から考えたのかな」と問い返し、**情報との結び付きを意識させる**ことがポイントです。
- 目的に応じて必要な情報に着目して要約する**必要性を感じられるように**することがポイントです。特別活動や総合的な学習の時間など、他教科等の学習で生徒が要約した文章を取り上げ、相手や目的を踏まえた上で複数の文章を読み比べ、内容を検討することも考えられます。

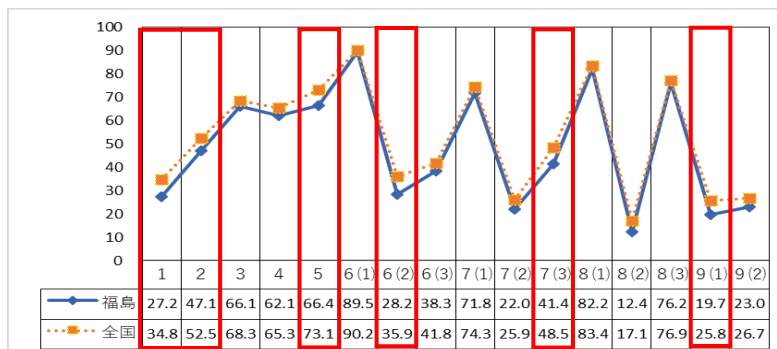
中学校数学

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

課題が見られた設問



- 1 「連続する二つの偶数を、文字を用いた式で表す」
- 2 「等式を目的に応じて変形する」
- 5 「簡単な場合について、確率を求める」
- 6 (2) 「目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明する」
- 7 (3) 「複数の集団のデータの分布から、四分位範囲を比較する」
- 9 (1) 「筋道を立てて考え、証明する」

福島県で取り組むべき課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

設問5「簡単な場合について、確率を求めることができるかどうかをみる」問題の誤答分析をすると、以下の点に課題があることが見えてきます。

② 誤答分析から

正答の「4分の1」と解答した生徒は66.4%であるのに対し、「2分の1」と解答した生徒は11.3%、「3分の1」と解答した生徒は9.3%でした。起こりうる全ての場合を数え上げることができていないと考えられます。

③ 指導の重点

表と裏の出方の全ての場合は（表、表）、（表、裏）、（裏、表）、（裏、裏）の4通りであり、どの場合が起こることも同様に確からしいと確認し、2枚とも裏が出る確率を

「4分の1」と求められるようにすることが大切です。授業では表と裏の出方の全ての場合が「2枚とも表」、「1枚が表で1枚が裏」、「2枚とも裏」の3通りであると考え、2枚とも裏が出る確率を「3分の1」とする誤りを取り上げることが考えられます。



樹形図や二次元の表などを利用して、起こり得る場合を落ちや重なりがないように数え上げる活動を取り入れることが大切です。

〈授業改善のポイント〉

- 樹形図や二次元の表などを利用するなど、視覚的に「見える化」を図ることで、起こり得る場合を落ちや重なりがないようにしながら数え上げる活動を取り入れることが大切です。
- 2枚とも裏が出る確率が「3分の1」ではなく「4分の1」であることを実感を伴って理解できるようにするために、多数回の試行をすることで求めた確率と比較することも考えられます。



「**感**じて**動**き出す」学びへ



1 学び出す

「確かめたい」「考えたい」「やってみたい」

すべての子どもが課題解決の見通しをもったり、解決方法を選択したりして、自ら動き出そうとする授業にします。

2 学び合う

「話したい」「聞きたい」「話し合いたい」

すべての子どもが友だちの話に耳を傾け、自分の考えを確かにしたり、新たにしたり、磨き上げたりする授業にします。

3 学びとる

「分かった」「できた」「がんばった」

すべての子どもが今日の授業で「自分は何がわかり、何ができるようになったのか」を実感できる授業にします。

教師が「**みる**」「**きく**」「**つなぐ**」授業へ
教師が「**話す**」授業から、

～ 授業改善チェックリスト ～

＜すべての子どもが「学び出す」授業 にするために＞

- ☐ すべての子どもに結果の見通しをもたせたり、解決の見通しをもたせたりしている。
- ☐ すべての子どもの多様な見方や考え方を引き出すことができる学習課題を設定している。
- ☐ 教材との出合わせ方を工夫し、「考えたい」「やってみたい」という思いを引き出すようにしている。

＜すべての子どもが「学び合う」授業 にするために＞

- ☐ 友だちの考えを聞きたい、自分の考えを話したいと思う発問を設定している。
- ☐ すべての子どもが、互いの考えを比較、検討、吟味することができる時間を確保している。
- ☐ 子どもと子どもの発言をつないで、集団で学び合える授業づくりをしている。
- ☐ 分からないことを「分からない」と言える安全・安心に学べる学級になっている。
- ☐ 教師が話しすぎることなく、子どもが話す機会を多く確保している。

＜すべての子どもが「学びとる」授業 にするために＞

- ☐ 授業で何が分かり、どのようなことができるようになったのか、自分の言葉で学んだことを振り返らせている。
- ☐ 学んだことを活用したり、次の学びにつなげようと考えたりする場面を位置付けている。
- ☐ 個に応じた振り返りの視点を与え、自分の成長や変容に気付くことができるようにしている。

- ☐ 子どもの学びから自分の指導を振り返っている。

5 ふくしまの強みを生かし、課題の克服を目指して!

【方略1】課題の克服に向け、調査結果の分析に取り組む

全国学力・学習状況調査の結果資料として、「報告書・調査結果資料」「授業アイデア例一覧」が公開されました。調査問題には、小学校においては第5学年まで、中学校においては第2学年までに、十分に身に付け、活用できるようにしておくべきと考えられる内容が出題されていますので、調査の対象学年だけではなく、全学年を通じた学習指導の改善・充実を図るための参考とすることができます。学校全体で組織的・継続的な取組を展開していきましょう。

学力の伸びを把握できる「ふくしま学力調査」の結果等と合わせて、各学校で詳細な分析をすることで、児童生徒一人一人や自校の課題を明らかにし、エビデンスに基づく学力向上につなげていきましょう。

課題に応じた学習指導改善に向けた取組

(例) 課題を踏まえた授業改善の取組、校内研修の充実
家庭における学習習慣や生活習慣の確立に関する保護者への働きかけ、補充学習の実施など



【方略2】課題の克服に向け、各種資料等の有効活用を図る

「授業アイデア例」を学習指導や児童生徒の学習状況の改善等に活用

「授業アイデア例」は、調査結果の課題分析と解決を図る事例を一体的に示してあります。自校の実態を基に、児童生徒の学習状況の改善に向け、日々の授業や研修会などの場面で活用してみましょう。

令和6年度全国学力・学習状況調査調査問題・正答例・解説資料について
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>



「ふくしま活用力育成シート」の活用による授業の質的改善

「ふくしま活用力育成シート」は、児童生徒一人一人に「思考力、判断力、表現力等」を育成するとともに、先生方の授業づくりを支援する目的で作成されています。義務教育課のホームページ上には、平成30年度から令和5年度までに作成された問題等が掲載されており、「教科・領域」から選択して取り組むことが可能です。育成すべき資質・能力を明確にし、各教科の「見方・考え方」を働かせることができる授業の実践につなげられるよう、計画的な活用をお勧めします。

【授業場面で】

- ・ シートを言語活動の創意工夫に生かす。
- ・ 「何を学習したか」を明確にするために終末場面で小問を活用する。

【家庭学習で】

- ・ 小問を宿題として配信する。
- ・ 記述式の正答を確かめるプロセスを大切にし、自己マネジメント力を高める。

【方略3】 様々な学習場面において、ICTの積極的な活用を図る

全国学力・学習状況調査の設問から

具体的な端末活用場面を扱う設問はもちろんのこと、情報活用能力を問う設問が多く見られました。

○ 小学校国語科より

互いの学校の取組をオンラインで紹介し合う場面において、目的や意図、聞き手の求めていることに応じて集めた材料を整理することが求められる問題です。聞き手の求めに応じて、即興的に話し方を工夫することや、話し言葉と聞き言葉との違いを踏まえた表現を工夫する力も求められます。言語活動として、ICTを活用してメールやオンラインでの交流活動等を設定することで、伝える必要感をもって目的や意図を考え、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができる学習活動を充実させることが大切です。

○ 中学校数学科より

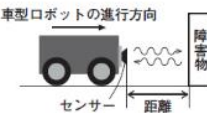
車型ロボットをプログラムによって走らせる実験から、得られたデータの傾向を読み取り、批判的に考察し判断することが求められる問題です。センサーやプログラミングの活用から実際に得られたデータを、表や箱ひげ図に整理して分析する等、日常生活や社会の事象等を問題として取り上げた数学的活動を充実させることも大切です。



② はじめまして。深緑小学校の村木です。今日は、とても楽しみにしていました。

① はじめまして。海風小学校の和田です。よろしくお願いします。

○ 障害物からの距離を測定できるセンサーがついている。



車型ロボットの進行方向

センサー

障害物

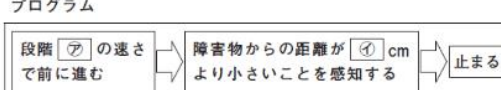
距離

○ プログラムの ⑦、⑧ に値を入れることによって、車型ロボットの速さと、障害物からの距離を設定し、車型ロボットの動きを止めることができる。

○ ⑦ は、速さとして最も遅い段階1から最も速い段階5まで設定できる。

○ ⑧ は、距離として3cmから500cmまで設定できる。

プログラム



段階 ⑦ の速さ
で前に進む

障害物からの距離が ⑧ cm
より小さいことを感知する

止まる

学習場面におけるICTの効果的な活用

- 各教科等の指導でICTを活用することは、児童生徒の学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や「主体的・対話的で深い学び」の実現、さらには、個に応じた指導の充実に資するものです。また、学習の基盤となる情報活用能力は、それぞれの教科等の役割を明確にしながら、教科等横断的な視点で育んでいくことが大切です。そのため、ICTを活用した学習場面として、一斉授業における「教師による教材の提示」のみならず、個別学習における「思考を深める学習」や協働学習における「学校の壁を越えた学習」等、学習内容と関連付けて多様な活用方法を計画しましょう。

「ふくしまGIGAスクールリーフレット」の活用

- 県教育委員会では、令和5年度まで実施した「ふくしま『未来の教室』授業充実事業」と「次世代のためのメディアリテラシー育成事業」の研究校の取組内容や有識者からのポイントを、ICT活用面と情報モラル面の2部構成にまとめました。特にICTの活用については、協働的な学びの場面での有効活用や授業と家庭学習をつなぐ役割を果たす活用例などを紹介しています。

詳細については、福島県教育庁義務教育課ホームページからも御覧いただけます。ぜひ御活用ください。

ふくしま
GIGAスクール
リーフレット



URL

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/623312.pdf>



6 各調査の特色に応じて ～「ふくしま学力調査」との整理～

「全国学力・学習状況調査」とは？

目的

毎年4月に実施される、文部科学省による全国調査です。

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

特長

- 各学校においては、調査結果を踏まえ、各児童生徒の全般的な学習状況の改善等に努めるとともに、自らの学習指導等の改善に向けて取り組むこと。
 - ⇒ 各教科の領域等における学習状況の把握が可能。その結果、授業改善に生かすことができる。
 - ⇒ 質問調査による分析が可能。その結果、学習との相関関係がある項目への支援をすることができる。

「ふくしま学力調査」とは？

目的

一人一人の学力の伸びがわかる、県独自の調査です。

児童生徒一人一人の学力の伸びや学習等に対する意識、生活の状況等を把握する調査を実施し、教育及び教育施策等の成果と課題を検証するとともに、その改善を図るための方策を構築し、一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

特長

対象
学年

小学4・5・6年
中学1・2年

対象
教科

国語
算数・数学

特長

一人一人の児童生徒の「学力の伸び」を経年で測定できるため、エビデンスとして効果的に機能する。

調査の仕組み

○ 同一児童生徒を継続的に調査する。

令和4年度
小学校4年

令和5年度
小学校5年

令和6年度
小学校6年

○ 一つ一つの問題に難易度を設定し、「どのくらい難しい問題を解く力があるか」で学力を捉える。

○ 異なる年度で意図的に同一問題を設定するなどして、「学力の伸び」を測定する。そのため、**問題は非公開**。

○ 平均点より高いか低いかという他者との比較ではなく、「学力がどのくらい伸びたか」という**個人内の比較に主眼**を置き、「学力の伸び」を可視化する。

○ 質問紙調査によって、「非認知能力」等について調査し、学力との関係を把握する。

各学年ごとのレベルの範囲（白が当該学年のレベルの範囲です）

	小4	小5	小6	中1	中2	中3
レベル12						
レベル11						
レベル10						
レベル9						
レベル8						
レベル7						
レベル6						

学力を数値化することで、視覚的に「学力の伸び」を把握できる

レベル	レベル(3分割)	数値
レベル12	12-A	36
	12-B	35
	12-C	34
レベル11	11-A	33
	11-B	32
	11-C	31
レベル10	10-A	30
	10-B	29
	10-C	28
レベル9	9-A	27
	9-B	26
	9-C	25
レベル8	8-A	24
	8-B	23
	8-C	22
レベル7	7-A	21
	7-B	20
	7-C	19
レベル6	6-A	18
	6-B	17
	6-C	16

P13